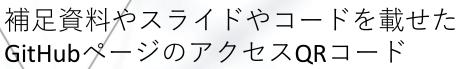


福田航平(東京外国語大学大学院)







背景と問題意識



使用例:教科書分析



先行研究とギャップ



今後・まとめ



Collins COBUILD Grammar Patterns



VACs抽出システムの構築



システムの評価と比較

補足資料やスライドやコードを載せた GitHubページのアクセスQRコード



1. 背景と問題意識

補足資料やスライドやコードを載せた GitHubページのアクセスQRコード



本発表の目的・概要

● 英語には<u>動詞を中心とした文法パターン(動詞項構造構文;VACs)</u>が様々ある e.g.) 動詞 + to不定詞 / 動詞 + that節 / 動詞 + 名詞 + of + 名詞

● 大規模かつ体系的に、学習者の言語使用の分析や教材研究をするために、<u>一般的</u> な英文法で扱われるVACsを網羅した分析を行えるようにしたい

● 英語テキストから**網羅的に様々な種類のVACsを自動で特定するシステムの構築**が 必要

● 網羅的な文法パターンのリソースであるGrammar Patternsに基づいて、VACsを特定するシステムの構築を試みた

動詞項構造構文(VACs)とは

VACs = Verb-argument constructions 動詞とその後ろに続く文法パターンのこと(動詞とその項構造パターン)

- 例:「give」という動詞の場合
 - ▶ I gave him a book. → 「動詞 + 間接目的語 + 直接目的語」というパターン
 - ▶ I gave a book to him. → 「動詞 + 名詞 + 前置詞to + 名詞」というパターン

● VACsの例

構造	例文
動詞 + 間接目的語 + 直接目的語 (V n n-obj)	bought him lunch. / ' show you some pictures.
動詞 + to不定詞 (V to-inf)	She <u>agreed</u> to help. / Koji <u>wants</u> to read the book.
動詞 + that節 (V that)	think that this is true. / hope this information helps.
動詞 + 前置詞in + 名詞 (V in n)	We <u>participated</u> in the activities. / Miki <u>lives</u> in this town.

なぜVACsか

用法基盤・構文アプローチSLA研究において、VACsが分析ユニットの中心

(e.g Ellis & Ferreira-Junior, 2009a, b; Ellis et al., 2014; Ellis, et al., 2016; Römer et al., 2018; Römer, 2019: among others)

1. 動詞は文の構造と意味を決定する中心的役割を担うため、動詞を中心

とした文法パターンであるVACsの習得は言語習得において重要

- ▶ 日本の英語教育でも文法参考書で「動詞の語法」として重視
- ▶ 用法基盤構文文法(Goldberg, 2006, 2019)では動詞を中心とする項構造構文が 分析の中心

2. VACsの知識が学習者の習熟度を予測できる因子

▶ 学習者が使用するVACsの種類やその数、動詞とVACsの結びつきが習熟度の予測に有効な指標となる (Kyle & Crossley, 2017; Huang et al., 2021; Hwang & Kim, 2022; Sung & Kyle, 2025)

用法基盤・構文アプローチ:「構文(construction)」の習得に関わる認知メカニズムを重視し、インプットの統計分布情報(frequency, contingency)が習得に重要であるとする立場(see Ellis & Wulff, 2025a, b)

VACs抽出システムの必要性

コーパスからVACsを<u>網羅的に</u>自動抽出・分析できるツールがあれば、大規模かつ体系的に

- 1. 学習者コーパスを使ってL2英語学習者のVACs知識の習得・発達を分析できる
- 2. 学習教材が提供するインプットをVACsの観点から体系的に分析できる
- 3. 大規模コーパスから母語話者が使用する実際のVACs分布を体系的に記述・分析できる

本研究では、様々な英語のVACsを網羅的に自動抽出可能なシステムの構築を目指す

2. 先行研究とギャップ

- 1. マニュアル (Ellis & Ferreira-Junior, 2009a, b; Park & Sung, 2023)
 - 手作業で構文パターンのラベルを付与
- 2. 統語依存フレーム(Kyle & Crossley, 2017, Römer, 2019)
 - 動詞を中心とする統語依存関係(syntactic dependency)のパターンをそのまま構文フレームと して利用する
- 3. ルールベース (Römer et al., 2015; Hwang & Kim, 2022)
 - 品詞タグや統語依存タグを利用して特定のVACsを識別するための一連の明示的ルールを作成 する
- **4.** 機械学習による分類(Huang et al., 2021)
 - 特徴量から構文パターンを確率的に予測する機械学習分類器を作成する
- **5.** ファインチューニング(Sung & Kyle, 2024a, b)
 - マニュアルで正解データを作成し、Transformerベースのファインチューニング

1. Römer et al. (2015): ルールベース

- Grammar Patternsに基づいた動詞+前置詞パターン(e.g. "V about n", "V in n")約20種類をRASP パーザー解析済みBNC-XMLから抽出
- 後続するN.C. EllisやU. Römerの研究(e.g. Ellis et al., 2016)はこれをもとにしているため、分析対象が動詞+前置詞パターンに偏重している
- 全体精度:Precision 0.78%・Recall 0.53%・F1-score 0.612

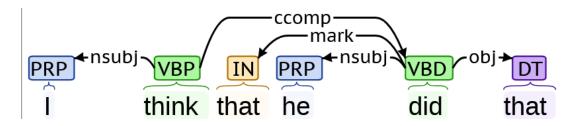
2. Huang et al. (2021):機械学習分類

- BNCから6,133文の母語話者データとEFCAMDATから1,000文の学習者英語データを組み合わせ、Maximum Entropyモデルを用いて構文パターン分類器を作成
- 動詞トークンの特徴量(語・品詞・依存関係・語埋め込みなど)から各構文パターンの確率を 計算し、49種類の構文タイプを識別可能なシステムを構築
- 全体精度:84.2%(accuracy)

- 3. Kyle (2016), Kyle & Crossley (2017) (TAASSC) :統語依存フレーム
 - VACsを利用した非常に多様な**統語的洗練性指標を算出するツール**
 - 統語依存関係を利用して、動詞とそれに直接従属する要素をVACフレームとしている

e.g.) I **think** that he **did** that.

→ nsubj-v-ccomp / mark-nsubj-v-dobj



- 動詞とその直接従属要素を依存関係ラベル(ccomp/xcomp など)でひとまとめにするため、 一般的な英文法で扱われる「V+that節/V+wh節/V+to不定詞」のような補文パターンと一 対一には対応しない
 - e.g.) I <u>think</u> that he did that. \rightarrow nsubj-v-ccomp
 - I <u>wonder</u> whether he did that. \rightarrow nsubj-v-ccomp

- 4. Hwang and Kim (2022): ルールベース
 - 依存関係と語彙情報の両方を使って手動で作成したルールを使用して、**11種類の構文**を識別するシステムを開発
 - 全体精度:Precision 0.86 / Recall 0.82 / F1-socre 0.82
- 5. Sung and Kyle (2024a, b):ファインチューニング
 - <u>9種類の構文</u>をマニュアルアノテーションしたデータを作成し、 RoBERTa-baseでファイン チューニング
 - 全体精度:F1-score 0.912(L1) / 0.928(L2 Spoken) / 0.915(L2 Written)

※ 上記で挙げている先行研究は、対象としている構文パターンやデータセットはそれぞれ異なるため単純な比較 は不可

先行研究の問題点

- 特定の構文パターンのみに偏重
 - ➤ Römer et al. (2015)とそれに後続する研究(e.g. Ellis et al., 2016)は、動詞+前置詞パターンに偏重
 - ▶ 逆にHuang et al. (2021)は前置詞は全て1つにまとめられ、前置詞タイプを区別しない
- 対象とする構文の種類が少ない
 - ➤ Hwang and Kim (2022):**11**種類の構文が対象
 - ➤ Sung and Kyle (2024a, b): **9**種類の構文が対象
- 一般的な英文法で扱われるような文法パターンに一致しない部分がある
 - ▶ 教育・教材研究にも活用するためには、一般的な英文法で扱われるパターンとの整合性も重要

以下の要件を満たすVACs抽出システムの作成を試みる

①網羅性 ②一般的な英文法との整合 ③高精度

3. リソース: Collins COBUILD Grammar Patterns

Collins COBUILD Grammar Patterns I: Verbs (Francis, et al., 1996)

Grammar Patterns = コーパスデータに基づいた文法パターン辞書

- COBUILD Grammar Patternsは、コーパスデータからボトムアップで文法パターンとそのパターンで 使用される語彙を特定し、**網羅的にリストアップ**したもの(Hunston, 2000)
- COBUILD Grammar Patternsを 英語学習に役立てる ことのできるリソースとして開発
- VACsの網羅的リソースとして利用している研究がある(e.g. Römer et al., 2015; Hunston & Su, 2017; Hunston, 2019, 2025; Perek & Patten, 2019)

例) "V n *of* n"パターン

	Verb group	noun group	of	of noun group/-ing clause		
Subject	Verb	Object		Adjunct		
The settlement	absolved	the company	of	all criminal responsibility.		
	Clear	your mind	of	other thoughts.		
They	suspected	him	of	doing away with Beryl.		

パターン内の動詞を意味グループに分類

- The 'rob' and 'free' group: defraud, denude, deprive, strip, cure, divest, rid, relieve etc.
- The 'inform' group: advise, assure, convince, inform, persuade, notify, remind, warn etc.
- The 'acquit' and 'convict' group: accuse, acquit, convict, suspect etc.

4. VACs抽出システムの構築

VACs抽出システムの構築

Grammar Patternsの例文データを使用し、ファインチューニング(RoBERTa-base)でモデルを構築

- 1. Grammar Patternsに基づいて68種類の動詞パターンを抽出対象に採用
- 2. Grammar Patternsの例文データに手作業で動詞パターンのラベルをアノテーション
 - ▶ 1文につき1つではなく、文中に出てくる抽出対象となる動詞全てにラベルを付与
 - ➤ CONLL-U Formatで動詞トークンのMISC欄にラベルを付与
- 3. RoBERTa-baseでファインチューニングを実行(方法は基本的にSung & Kyle, 2024bに倣った)

CONLL-U Formatでのラベル付与の例

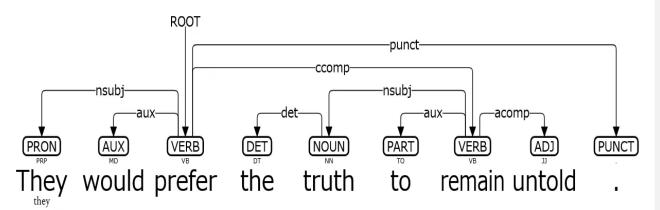
ID	FORM	LEMMA	UPOS	XPOS	FEATS		DEPREL	MISC	
1	Не	he	PRON	PRP	Case=Nom Gender=Masc Number=Sing Person=3 PronType=Prs		nsubj	_	
2	pleaded	plead	VERB	VBD	Tense=Past VerbForm=Fin	0	ROOT	Pattern=V_to-inf	
3	to	to	PART	TO	_	4	aux	_	
4	speak	speak	VERB	VB	VerbForm=Inf		xcomp	Pattern=V_with_n	
5	with	with	ADP	IN	-		prep	_	
6	me	I	PRON	PRP	Case=Acc Number=Sing Person=1 PronType=Prs	5	pobj	_	
7	privately	privately	ADV	RB	-	4	advmod	_	
8	•		PUNCT	•	PunctType=Peri	2	punct	_	

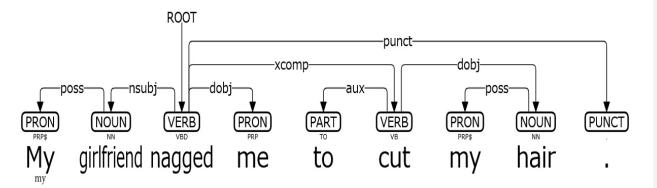
VACs抽出システムの構築

比較として品詞・統語依存タグをベースにVACsを識別するルールベースのシステムも作成

spaCyの`en-core-web-trf`モデルの解析結果を利用し、統語依存関係に基づく`DependencyMatcher`を使ってマッチングルールを様々なVACsに対し定義した

マッチングルールの例:V_n_to-infパターン





マッチングルール1:

- 動詞がある(アンカー動詞とする)
- ② アンカー動詞に ccompの依存関係で依存している動詞トークンがある (comp_token)
- ③ comp_tokenにnsubjの依存関係で依存している名詞・代名 詞がある
- ④ comp_tokenに依存している不定詞マーカーのtoがある (TAG = TO)

マッチングルール2:

- ① 動詞がある (アンカー動詞とする)
- ② アンカー動詞に xcompの依存関係で依存している動詞トークンがある (comp_token)
- ③ アンカー動詞に dobjの依存関係で依存している名詞・代 名詞がある
- ④ comp_tokenに依存している不定詞マーカーのtoがある (TAG = TO)

VACs抽出システムの構築:抽出例(イメージ)

テキスト例

The new employee seemed nervous during his first presentation. He talked about his previous experience and described what he wanted to achieve. The manager found his ideas interesting and encouraged him to develop them further.

ラベル付与

The new employee <u>seemed</u> nervous during his first presentation. He <u>talked</u> about his previous experience and V_ADJ V_ABOUT_N

<u>described</u> what he <u>wanted</u> to <u>achieve</u>. The manager <u>found</u> his ideas interesting and <u>encouraged</u> him to <u>develop</u>

V_WH V_TO_INF V_N_OBJ V_N_ADJ V_N_TO_INF V_N_OBJ

them further.

抽出

```
[('seemed', 'V_ADJ'), ('talked', 'V_ABOUT_N'), ('described', 'V_WH'),
('wanted', 'V_TO_INF'), ('achieve', 'V_N_OBJ'), ('found', 'V_N_ADJ'),
('encouraged', 'V_N_TO_INF'), ('develop', 'V_N_OBJ')]
```

5.システムの評価と比較

VACs抽出システムの構築

正解データのデータ数

センテンス数	2867	80%を訓練データ
トークン数	42352	10%を検証データ
ラベルつきトークン数	5771	10%をテストデータ

全体的な精度

ファインチューニングモデル

Metrics	Score
Precision	0.925
Recall	0.947
F1-score	0.936

ルールベースモデル

Metrics	Score
Precision	0.931
Recall	0.909
F1-score	0.920

先行研究との比較

	Römer et al. (2015)	Huang et al. (2021)	Hwang & Kim (2022)	Sung & Kyle (2024, a, b)	本研究
手法	ルールベース	機械学習分類	ルールベース	ファインチューニング	ファインチューニング
精度	F1 = 0.612	0.842 (accuracy)	F1 = 0.82	F1 = 0.912 (L1データ)	F1 = 0.936
構文 種類数	20種類	49種類	11種類	9種類	68種類

[※] 上記で挙げている先行研究は、対象としている構文パターンやデータセットがそれぞれ異なるため、単純な精度の比較はできない

6. 使用例:教科書のVACs頻度分析

分析の内容

分析対象

- ある1つのシリーズの現行検定英語教科書を中1~高3までを通して分析(6冊)
- メインレッスンの本文とキーセンテンスの部分のみを抽出し、分析対象とした

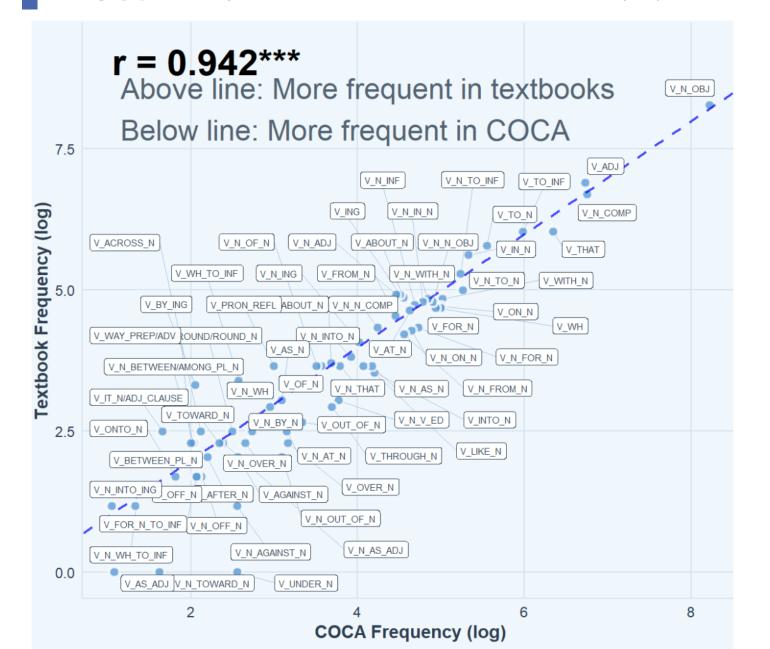
分析内容

- VACsの使用頻度の点で、教科書の英語は自然な英語使用と比較してどうか
 - ➤ 教科書のVACsの頻度は参照コーパス(COCA)と相関するか
 - ➤ 教科書で有意に過剰/過少使用されているVACsはあるか

対象教科書データの語数

VACs	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
総語数	2080	3090	3797	8151	8881	11232	37231
対象VACs総頻度	265	375	461	971	1119	1330	4520

教科書と参照コーパスのVACs頻度の比較

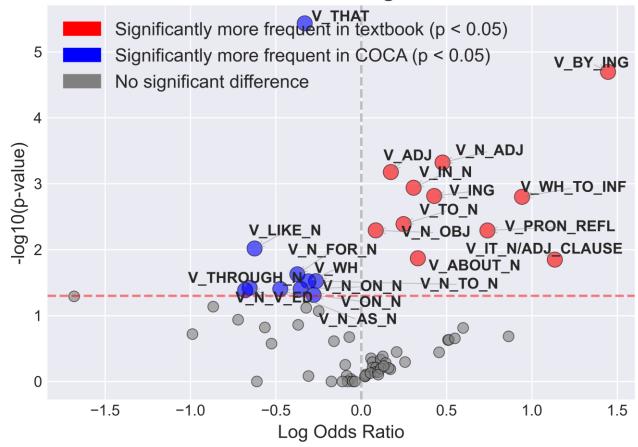


教科書におけるVACsの頻度 と参照コーパス(COCA)に おけるVACsの頻度は強い相 関を示している

VACsの使用頻度の点から見て、教科書は自然な英語使用を反映しているといえる

教科書で過剰/過少使用されているVACs

Volcano Plot: VAC Usage Differences



Notes:

- 縦軸:対数化したp値(赤線より上が p < 0.05)
- 横軸:効果量(Log Odds Ratio)
- Fisher's exact testで検定

● 過剰使用(overuse)

- **V_BY_ING** (e.g. let's **start** by comparing ...)
- V_IT_N/ADJ_CLAUSE (e.g. I thought it best to leave ...)
- V_WH_TO_INF (e.g. ... and knew how to cook ...)
- **V_PRON_REFL** (e.g. How can they **prepare** themselves?)
- **V_N_ADJ** (e.g. It **makes** me happy.)
- V ING (e.g. Did you enjoy hiking this morning?)
- V_ABOUT_N (e.g. Let's think about it together.)
- V_IN_N (e.g. They live in London now.)
- V_TO_N (e.g. I go to dance lessons.)

● 過少使用(underuse)

- V_THROUGH_N (e.g. I went through 17 operations ...)
- V_N_V_ED (e.g. I had three wisdom teeth extracted.)
- **V_LIKE_N** (e.g. It **looks** like a mountain ...)
- V_N_AS_N (e.g. I consider him as a friend.)
- V_N_FOR_N (e.g. I don't blame you for being upset.)
- V_N_ON_N (e.g. You can put it on your window.)
- V_THAT (e.g. I know that he is honest.)
- **V_WH** (e.g. I don't **know** why Miki is sad.)
- **V_ON_N** (e.g. ... children can **focus** on the story.)
- V_N_TO_N (e.g. Can you send a video to me?)

7. 今後・まとめ

今後

- 1. L1コーパスデータを使って、もっと**自然な英語に対するVACs抽出システムの精度を検証**する
- 2. 学習者データにVACsのアノテーションを付した正解データを用意し、
 - ▶ モデル訓練に学習者データを含める
 - ▶ 学習者データに対する精度を検証する
- 3. どのような場合に精度が高い/低いのか検証する
- 4. 上のような検証を経たのちに、誰にでも利用可能なパッケージとして公開する

今後

- 5. 大規模母語話者コーパスに適用し、VACsデータベースを作成する
 - ▶ 教育・研究に利用な可能なデータベースを作成・公開
- 6. 学習者コーパスに適用し、学習者のVACs使用を分析する
 - ➤ 構文多様性(Constructional diversity)の測定(既存のツールとの比較)
 - ➤ 習熟度が上がるにつれて使用頻度が変わるVACsの特定
 - ➤ 各VACs内の動詞分布の観点から学習者のVACs使用の特徴を分析

まとめ

- 今回作成を試みたVACs抽出システムの特徴
 - 1. 網羅性:68種類を対象
 - 2. 一般的な英文法との整合:Grammar Patterns準拠
 - 3. 高精度:F1 = 0.936

● 例文データをモデル学習に使用しているため、もっと一般的なテキストに汎化できるか検証の必要あり

- 1. Ellis, C. N., & Ferreira-Junior, F. (2009). Constructions and their acquisition: Islands and the distinctiveness of their occupancy. *Annual Review of Cognitive Linguistics*, 7(1), 188-221. https://doi.org/10.1075/arcl.7.08ell
- 2. Ellis, N. C., & Ferreira-Junior, F. (2009). Construction learning as a function of frequency, frequency distribution, and function. *The Modern Language Journal*, *93*(3), 370-385. https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.2009.00896.x
- 3. Ellis, N. C., Römer, U., & O'Donnell, M. B. (2016). VACs in L2 Knowledge and Processing. Language Learning, 66(S1), 123-153. https://doi.org/10.1111/lang.5_12177
- 4. Ellis, N. C., & Wulff, S. (2025). Usage-based Language Learning: Linguistic constructions and their learning. https://doi.org/10.31234/osf.io/fqtsx_v1
- 5. Ellis, N. C., & Wulff, S. (2025). Usage-based Second Language Acquisition. https://doi.org//10.31234/osf.io/bnq9w_v1
- 6. Francis, G., Hunston, S., & Manning, E. (1996). *Collins COBUILD grammar patterns I: Verbs*. Collins CoBUILD.
- 7. Goldberg, A. E. (2006). *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford University Press. https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780199268511.001.0001
- 8. Goldberg, A. E. (2019). *Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton University Press. https://doi.org/10.1515/flin-2019-2020
- 9. Huang, Y., Murakami, A., Alexopoulou, T., & Korhonen, A. (2021). Subcategorization frame identification for learner English. *International Journal of Corpus Linguistics*, *26*(2), 187-218. https://doi.org/10.1075/ijcl.18097.hua
- 10. Hunston, S. (2019). Patterns, constructions, and applied linguistics. *International Journal of Corpus Linguistics*, 24(3), 324-353. https://doi.org/10.1075/ijcl.00015.hun
- 11. Hunston, S. (2025). *Pattern, Construction, System: A Unified Approach to Grammar and Lexis*. Cambridge University Press. https://www.cambridge.org/core/product/290B38732701BC5C991813CC63641D26
- 12. Hunston, S., & Su, H. (2017). Patterns, Constructions, and Local Grammar: A Case Study of 'Evaluation'. *Applied Linguistics*, 40(4), 567-593. https://doi.org/10.1093/applin/amx046
- 13. Hwang, H., & Kim, H. (2022). Automatic Analysis of Constructional Diversity as a Predictor of EFL Students' Writing Proficiency. *Applied Linguistics*, *44*(1), 127-147.

- https://doi.org/10.1093/applin/amac046
- 14. Kyle, K. (2016). Measuring syntactic development in L2 writing: Fine grained indices of syntactic complexity and usage-based indices of syntactic sophistication Georgia State University].
- 15. Kyle, K., & Crossley, S. (2017). Assessing syntactic sophistication in L2 writing: A usage-based approach. *Language Testing*, *34*(4), 513-535. https://doi.org/10.1177/0265532217712554
- 16. Park, J.-H., & Sung, M.-C. (2023). Expansion of verb-argument construction repertoires in L2 English writing. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 62(2), 903-925. https://doi.org/10.1515/iral-2022-0145
- 17. Perek, F., & Patten, A. L. (2019). Towards an English Construction using patterns and frames. *International Journal of Corpus Linguistics*, *24*(3), 354-384. https://doi.org/10.1075/ijcl.00016.per
- 18. Römer, U. (2019). A corpus perspective on the development of verb constructions in second language learners. *International Journal of Corpus Linguistics*, *24*(3), 268-290. https://doi.org/10.1075/ijcl.00013.roe
- 19. Römer, U., O'Donnell, M. B., & Ellis, N. C. (2015). Using COBUILD grammar patterns for a large-scale analysis of verb-argument constructions: Exploring corpus data and speaker knowledge. In N. Groom, M. Charles, & S. John (Eds.), *Corpora, Grammar and Discourse: In honour of Susan Hunston* (pp. 43-72). John Benjamins. https://doi.org/10.1075/scl.73.03rom
- 20. Sung, H., & Kyle, K. (2024). Annotation Scheme for English Argument Structure Constructions Treebank. In S. Henning & M. Stede, *Proceedings of The 18th Linguistic Annotation Workshop (LAW-XVIII)* St. Julians, Malta.
- 21. Sung, H., & Kyle, K. (2024). Leveraging pre-trained language models for linguistic analysis: A case of argument structure constructions. In Y. Al-Onaizan, M. Bansal, & Y.-N. Chen, *Proceedings of the 2024 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing* Miami, Florida, USA.
- 22. Sung, H., & Kyle, K. (2025). Usage-based analysis of L2 oral proficiency: Characteristics of argument structure construction use. *Studies in Second Language Acquisition*, 1-27. https://doi.org/10.1017/S0272263125100995